論文の和文要旨

論文題目	川端康成の小説『雪国』における文化的・言語的要素のインドネシア語への翻訳とその文学的要素への影響
氏名	Wiastiningsih

文学作品を翻訳することは、ある社会から別の社会に価値を伝えようすることである。文学そのものは、由来するコミュニティと分けられないため、特定の社会に属する文化や規範を反映しているものである。言い換えれば、文学作品を翻訳することは、ソース言語から、読者が異なる独自の文化を持つターゲット言語に文化を伝えようとする試みである。

本稿は、川端康成の『雪国』をインドネシア語に翻訳する過程における日本語と日本文化の影響を理解することに集中している。主な焦点は抽象的・具体的文化及び人称代名詞である。抽象的文化の翻訳に関する議論では日本人とインドネシア人の数え方の相違、そして日本人のみに理解できる文化的概念に焦点を置く。一方、具体的な文化翻訳の議論は、日本社会でしか見られない物事の翻訳を分析している。本稿で論じた文化的な言葉を記載する際は、kotobank.jp から引用した定義も記載し、引用していることも明確に記載する。最後に、取り上げる人称代名詞は、主人公の一人称代名詞と二人称代名詞である。分析には、主人公の対人関係に対する翻訳の効果が含まれている。本稿では、小説の直接翻訳と間接翻訳を検証している。また、間接翻訳のソースであるため、英語の翻訳版も表示する。

本研究では、3 つのことが明確になった。第一は、数字の翻訳に関する結論である。数字の翻訳には変化と変換がある。変化は年齢に関する数字の翻訳に見られ、変換は尺、丈、里のような日本語には独自の数え方の翻訳に見られた。第二は、日本の具体的・抽象的な文化の翻訳に関する結論である。全体の分析から、日本の具体的・抽象的な文化をインドネシア語に翻訳する中では新しい方法があることが分かった。その新しい方法は本稿では内部借用法（internal borrowing）と名付けた。内部借用方法は、ソース言語で他の単語を借用して、異なる単語を同じ言語で翻訳する方法である。最後に、文学作品の登場人物が使う一人称代名詞と二人称代名詞の違いは、原文において異なる対人関係を伝えている。したがって、人称代名詞の翻訳が異なると、登場人物同士の異なるレベルの対人関係を伝えるであろう。分析の結果に基づいて、直接翻訳でよく使われる *saya/aku-engkau,saya/aku-kamu,saya/aku-kau* の組み合わせは、間接翻訳でよく使われる *saya-Anda, saya-engkau, saya-kamu* の組み合わせよりも、より密接な対人関係を伝えると言える。

キーワード: 抽象文化，具体的な文化、人称代名詞